

窓

論説委員室から

仮設住宅と保健師と

宮城県気仙沼市の仮設住宅でのごと。自宅を津波で流され、独りで仮設に暮らす女性が語ったそう。

「家というのは、ただの建物じゃない。思い出も人との関係も、みんなそこにあった。私たちは震災の日すべてを失ったのじゃなく、毎日まいにち、近くにあったはずの何かがないと気づくたびに、喪失を体験するんです」

保健師の森下絵理さんが聞いた。保健協力のNGOシェアとともに気仙沼市に滞在し、市の求めで仮設住宅4カ所を世帯ごとに訪ね、被災者の健康状態を聞き取り調査した。気になったのは、仮設のタイプによって住み心地が随分違うことだ。

デザインに気遣ったものもあれば、昔ながらのパネル造りで、湿気がこもるものもあった。メーカーの違いによるらしい。

用地難のため、ハエが飛ぶ建設地もあった。大都市と違い、狭い家に慣れている人は少ない。体調や精神状態を崩している人もいた。

「仮設に住む2年間を短いとみるか、長いとみるか。家があるだけでいいとは言えない」。森下さんは保健衛生を心配する。日ごろは東京・山谷のNPO、訪問看護ステーションコスモスで働いている。同僚看護師16人が交代で被災地支援に通ったという。なでしこもすごいが、コスモスにも頭が下がる。〈中島泰〉